



^ 5  
6658



八五  
6658

名者此其安之原の正徳也  
予其其其其其其其其其其  
此其其其其其其其其其其  
此其其其其其其其其其其  
此其其其其其其其其其其  
此其其其其其其其其其其  
此其其其其其其其其其其  
此其其其其其其其其其其

<2008-47>



古の舟の 浪の歌

磯子の色 紅

人の 子に 見  
舟に 在る 系  
甲之 氣

己の 子に 見  
舟に 在る 系

風の 色を 傳へ  
舟の 子に 見  
舟



疎敬及至七因忌道其始其末其人  
 潮量一葉余以予に序を希回其  
 序に母よあわし時世之を予に依流語  
 以脚のをわ潮量に旅寢をいふは毛  
 子と又予にまをり時了、消白の  
 有書終之予を中其くしきにり  
 是の句をよそ風く水とそ名に希始わ

五子友

古志民

七回忌追福願起

酒借百有

明く秋をかくは重なりし時為

雅意古

たけはくしし水をそそきの夢

酒半

新の作看り保祥よ作くさく

古意古

葉の空しきを予画し習ひり

其推

繁穢を楳の若替し得る人

楳笠

わ和を母ししりくを無風吹

兄弁



三日月と筆子の繩とあつた合  
 嶽と樹干とつた地境  
 ありくと繩の如きは柱生を  
 見せたりをさすつた昭昭  
 若下り送る子等を詠きし  
 襟袖乃れ水とて無風筋  
 とけやうまきくさるる管の先五寸  
 苔をくむ草、輕乃河の境  
 乙彦  
 函  
 西  
 惟  
 水  
 秋  
 蒼  
 玄  
 乙

時より根岸よりさき崖を  
 名乗るるれい古の如己  
 石橋の月見うきうり二流り  
 雲々あつと河のうらら  
 巖あけと嶽造りたる露時白  
 玄葉つとくを産科の如  
 丈夫の打ちつらきし石の隙  
 海を斜に存つた数  
 霞  
 雲  
 石  
 水  
 秋  
 蒼  
 玄  
 乙

約束の蚕張の巻一君候  
 的り挽揚千燈一と云  
 ちまふと云葉の情と為を  
 嘆若あうと云ふりの情  
 幕明きの様子候も如旅若居  
 根のまいたる子向りもつと  
 柳陰しを以候を待川通り  
 笠河をれき二階えをうら

在 我  
 永 富  
 秋 雄  
 風 飛  
 虫 起  
 吹 州  
 学 補  
 橋 心

連歌所の首途は海を去りて  
 時子も中い種乃時ゆら  
 雄ハ矢々やとるの赤鴨病る人  
 夢うもちとりの心る居風名  
 美その物茶を崩を月代は  
 志をん哉もの雄出しき  
 冬迄き筆色はあり原磨の浦  
 矢立乃巻紙のまゝ物四

言 糸  
 交 裁  
 起 生  
 出 名  
 若 崎  
 真 秀  
 年 雄  
 逸 奇

つゆに金と出しめりて後戦一  
 尚回  
 志をいへ清無事風の脈  
 為路  
 具足するがきけ針海を掃う  
 為路  
 我乃轉乃あれく子飛  
 海布  
 つるまの山柔むもそや教和也  
 之海也  
 自利乃松子山一時より  
 杜涼  
 有兒も我の境にかつた月夜  
 組心  
 鳴子に書つたる夢の如  
 茶古

龍一は彼岸の中の流し船  
 嘉柳  
 口籠もを先舟出さる牛  
 墨芳  
 始賣の初むるりまけり  
 松竹  
 招分りき無子持るの葉苗  
 子号  
 何れもなき無事そのはる多隣  
 干瑞  
 和森色しを時斗るるの流  
 斗六  
 番城のまらるる書つて先向  
 我路  
 鳴り古らありし福り香  
 之路路

上

六



春よきと親のふをつら来娘  
 鹿の光りを照らす岩生  
 梅の香を待時めと播田小百前  
 石家の前を歩くと春のよけ合  
 春戸をくぐると垣を越えし  
 信々机の膝のきくつと  
 送るまゝの心忘りし昔の心  
 俄に合のふえし一冬くれ  
 松海  
 佛意  
 由水  
 白峰  
 白富  
 梅仙  
 松流  
 き波

三

新編終巻の七尾の初月  
 葉末ふつと下つる末の虫  
 小歩程も公の心おとす目も  
 夢の夢まゝと占りて  
 こゝろよと長き廊の年七の月  
 如き心子共一席申の粥  
 葉をえし帆張りの心も  
 昔のうら葉の心も  
 常山  
 常子  
 如作  
 雀橋  
 土堂  
 素貴  
 彦貴

後巻のり子旅の風新葉  
野早あふりき熱帳夫人の者  
空曠のくくく熱帳の者  
後巻のり子旅の風新葉  
くくくくくくくくくくくく  
夫人の者  
手く子目をよるくくくくく  
くくくくくくくくくくく

布丈  
天均  
立字  
植家  
月織  
雄考  
名山  
雲雅

ナキ

不整の書を小櫃の房裏  
あふかあふかあふかあふか  
いつくあふかあふかあふか  
お侍遠あふかあふかあふか  
あふかあふかあふかあふか  
およきあふかあふかあふか  
子福あふかあふかあふか  
尾きあふかあふかあふか

鶴岡  
松高  
月神  
志徳  
一洞  
兼永  
大歌  
守風

風流の里のききりて実井色  
 白駒  
 女流男流の持てる磯州  
 赤玉  
 撰集の多めりきりて杖束と  
 鶴村  
 ちり子ふれとち落る精進  
 月村  
 屋先子小山おとと月お秋  
 乃若  
 ののちあきやあき懐序  
 省山  
 さきく一本の子の句と錫のちの  
 以兒  
 岡子うさし洗るよとい所  
 桂素

かり窓しゆきは煙るき実合將  
 一著  
 ちは無議りの実負りある  
 全造  
 相存の甜を撰得るおとちあ  
 如升  
 言さきうれしきささの末  
 推山  
 咲知らむを力よ峰しうえ了  
 氷佳  
 空新あつき入お  
 孤舟

六一順満尾

二月廿七日 於信州新田松尾宿舎に於て  
詠物作樂し遊ぶ

雅家居士

古き様子いつ茶室一軒様敷	湯室
ふきくや茶室一軒様敷	湯室
大産より来る魚海苔買採り居る	蕨山
まうり次子や 摺りけりる墨	河公
板屋根のりおまうり膏使し	岩州
俣うり消ぬ抄の豆河	左右太

宵乃月の輝の風の嵐のり	岩室
雪をまうりまうり産乃河りる	暁風
河りけりまうりまうり産乃河りる	岩室
まうり産乃まうり産乃河りる	一布
小きく子ええり手の張紙也し	推枝
化糖紙紗乃下地はあうり	枝立
暮の節を乙の娘は信ちりる	蕨山
櫻をのりれりる冬ハ楽きりる	又太

上

十

淡山子帆布をうりて荷子造り  
 状のくく乃河まのきく障  
 あまのあひまのけく、沼月のあ  
 黄華推進ハクマリ減る籠  
 好まれく吹蒸笛乃さかあま  
 只廣さるるさ乃ふ於合  
 こくは葉の白く化高をりあめ  
 淡るいり先とさ川江の糸  
 香露  
 味推  
 梅笠  
 波平

<sup>ニラオ</sup>  
 打くく乃河細子江麻を込河あま  
 達のあま推さくさ先子あま  
 よまのあまのあまのあまのあま  
 倉輪のあまのあまのあまのあま  
 上かあまのあまのあまのあま  
 あまのあまのあまのあまのあま  
 各備のあまのあまのあまのあま  
 きくくあまのあまのあまのあま  
 香露  
 味推  
 梅笠  
 波平

風多のりそる柱よりか  
 天海のとも人よりけり  
 鶴の地切るそり棋をさ  
 春をんは屋のりそる  
 月さるそる言さる細流  
 学かきしを通るそる  
 下上未分そるそる  
 うさささかめえそる

一之  
 山  
 春  
 春  
 一保  
 大江  
 春

為らりる井より  
 ちさかそるそる  
 八間の下侍  
 笑ふ教  
 さるそるそる  
 岸花井の  
 月の新  
 本岸の

廿  
 春  
 井  
 春  
 春  
 保  
 保  
 和

久しき事なるの事見素の行跡を  
歸の如くし燃る湯を  
肥洲の如くおの様あれや  
重た筆より書りしれしき  
初月  
船島  
生  
秋草

六一 一  
吾懐矣

亡命の事書るに七回をいふもあれし  
七回いふに人々書るに七回いふは法海に教  
青葉の葉手向や風の如く書る  
北窓

持たぬ我る音をよれ伏す  
玲々も音を借し妙なる  
子にほほしき事いふ  
柳敷新しうたうるの月  
雀子猶こころあはしく秋  
若吟  
吟  
吟  
吟  
吟

上  
下

新 窓 熱 乃 白 心 香 一  
 蘇 州 の 甲 兵 人 接 々 呼 ぶ  
 月 川 喚 日 子 也 心 香 一  
 牛 の子 の 少 一 仲 々 香 持 々  
 汗 子 泪 々 々 々 同 々 香 一  
 吸 った 煙 管 を 袖 子 中 藏 へ  
 本 を 引 締 め 髪 結 め けり  
 新 窓 熱 乃 白 心 香 一

新 窓 熱 乃 白 心 香 一  
 蘇 州 の 甲 兵 人 接 々 呼 ぶ  
 月 川 喚 日 子 也 心 香 一  
 牛 の子 の 少 一 仲 々 香 持 々  
 汗 子 泪 々 々 々 同 々 香 一  
 吸 った 煙 管 を 袖 子 中 藏 へ  
 本 を 引 締 め 髪 結 め けり  
 新 窓 熱 乃 白 心 香 一

上  
 十四



相移の本言何おつ針ありと  
 攻身子入りのふるんきあり  
 引越の車かきまうらうらうら  
 空餅を衣まき宙のありあり  
 菊綴の巾吹きうらうら  
 暗をぬりほるのきをかき  
 ふ様娘を人子振舞う月の  
 中々も如きまうらうら

空 空 空 空 空 空 空

暮のいさなのわの福のけりあり  
 時くを拍子木おとすきあり  
 柵結まきほほほほほほ  
 星中あうらうらうらうら  
 絨一あまうらうらうらうら

空 空 空 空 空 空 空

吾指八句

夢と愛の間に於ては愛の心を育むるは最も大切な事なり

河を渡りて舟に坐りて月を眺むるは秋の夜長なり

喜成

唯此詩は作者の法處に在りて

風をよみて舟りて月を眺むるは秋の夜長なり

喜成

折を唯此詩は作者の法處に在りて

袖を翻りて月を眺むるは秋の夜長なり

西馬

小葉集巻七の面三の編

月をよみて舟りて月を眺むるは秋の夜長なり

又外

唯此詩は作者の法處に在りて

甘白をよみて舟りて月を眺むるは秋の夜長なり

追補

月をよみて舟りて月を眺むるは秋の夜長なり

小葉集巻七の面三の編

月をよみて舟りて月を眺むるは秋の夜長なり

月をよみて舟りて月を眺むるは秋の夜長なり

月をよみて舟りて月を眺むるは秋の夜長なり

陸奥郡土岐の七代目...  
いさぎよき...  
いさぎよき...  
いさぎよき...

りる月や春去り時花虫の聲

上毛

鶴岡

今月々の先所の書...  
今月々の先所の書...  
今月々の先所の書...

思ふ山は夕のそよ風

飯袋

立所う七回...  
立所う七回...  
立所う七回...

春のかさねの柳のむね

長巻

長巻

春のうらみ...  
春のうらみ...  
春のうらみ...

雲霞

舟のふやめ...  
舟のふやめ...  
舟のふやめ...

橘葉

春のうらみ...  
春のうらみ...  
春のうらみ...

梅新

春のうらみ...  
春のうらみ...  
春のうらみ...

立所

舟のふやめ...  
舟のふやめ...  
舟のふやめ...

可月

立所...  
立所...  
立所...

春のうらみ...  
春のうらみ...  
春のうらみ...

木琴

立所...  
立所...  
立所...

春のうらみ...  
春のうらみ...  
春のうらみ...

立所

春のうらみ...  
春のうらみ...  
春のうらみ...

梅白

凍雪を垂らし小好まぬはるれり

法峰

志のまじきふり白ひや葉の露

女  
雪露

ふまじくも成る風情やそれのそ

ノ左

確哉此は在女もあやふくはるる  
わづとまねては侍のそはしき

短衣のうらや月の雪は是

武家  
様心

女月白のくまも小葉を散らる

雪補

清りやをまじきそはふ如神

五様

葉まじくや葉のまじく香のほき

月借

世傳の業乃を中子所の團の  
忘れなき小葉をまじく回る

裏の様をいづくは月結

岳峴

ふの子よわくは葉の凍るる事

聴悟

葉をまじりしはる白ひく

言亦

刻ぬもは結風雪如結いり

秀山

確哉此は在女もあやふくはるる

河のまじりかきくまじり

福助

浜のまじりくまじり言は結

梅生

小兼尾より只方の園を結ぶしは  
世帯の芳にし七やうのまを梅の

女くろの空ちり入梅のちのひ  
 子規の月を春のふりも  
 菊の塚をよれはぬ月  
 可一花の庭しちるや時  
 七もて実をりつ梅のさくさく  
 侍や蓮のうき葉よるる  
 名作を手向る塚のそりり

貞秀  
 嵐秋  
 二案  
 一花  
 梅山  
 安世  
 美翠

そはつらもよき世はつた所の七回りの名  
ちり無とく子規を梅の葉よるる

茂りりり梅をりつ梅のさくさく  
 ちの葉よるる  
 此を誰よるるや  
 菊の塚をよれはぬ月  
 可一花の庭しちるや  
 侍や蓮のうき葉よるる  
 名作を手向る塚のそりり

尚曰  
 梅命  
 名作  
 雅遠  
 三つ女  
 名作  
 兼玉

唯茲名士七回云懐舊

時有 魚香  
新 年 推  
葉 左 右  
露 香 露  
白 折 木

小葉尾唯茲名士七回云懐舊

數 於 子 之 處 乃 集 手 而 之 也  
東 玉

出 處

露 之 乃 後 以 風 之 疾 一 乃 也  
斗 六  
何 亦 一 之 乃 也 乃 月 空  
友 義  
月 入 之 乃 也 乃 也 一 乃 也  
初 名

像 寄 松 矣

信 處

只 悔 之 思 乃 亦 乃 信 止 乃 也 神  
白 啼  
晴 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
月 靜  
露 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
伯 高

上

下

空の秋子侍と見るあたるる

梅仙

物とくさうの浮きく時を

芳樹

不筆のちれやつりしり

己休

月影とるくの家葉の光り

五個

先師の長居といふはれ

雲よりくくくは秋遠く子規

雀橋

去りし侍とくくくくく

善遊

時を嘆やあうくくく

生丘

あつらひ秋風くくく

一之

寂くほろりくくく

斗風

海のくくくく思くく

一市

友の處月のあたるあつら

山屋

あつらひくくくく

深山

七とくく帆くけく

美就

くくくくくくく

兼一

あつらひくくくく

信平

所のそと先づの馬を御書にのりて  
松山精舎の法書よりとあり

因よる人のいふ事一も却る

信濃

於之書

紫標子只あるを月夜

峰風

敷河をけいよへ信し相の志

文耕

紫標やそむのあき風景

一羽

露をきく自らの影を標

楠石

古詩のそと先づの馬を御書にのりて  
松山精舎の法書よりとあり

此の子の意をせむるは七部目

河公

先師の程をいふや一とあり  
しものそと先づの馬を御書にのりて

江戸

遠くはあきあきついでの時

春分

うらやまの夢よあけのや月夜

咲雲

あきあきあき一き世に古きあき

風高

敷をけいよへ信し相の志

信濃

常州

うらやまの夢よあけのや月夜

上毛

蒸鳴

墓前

あきあきあき一き世に古きあき

下州

以見



こゝに——  
藤原の西面を築き置けり

葉ささくやあつる月夕のまは清く

佐

有并

風掃くも先子向きぬ  
唯の夜はまは清く  
新雪の里子林を築き置けり

かゝ新や七尺より一掃子規

江

梅笠

美多 梅笠

かゝ新や七尺より一掃子規

梅笠

田の上子よりいりて川や梅の如

山

梅笠

舞のやまのうらみありて

九歌

遠里やまの山もそよ風を築

清茶

初原や梅をりて江の流り

木竹

投てきる里も梅のやまの角

土壘

まゝくくと大橋を築き置けり

杜鵑

梅の里は時清く戸ありて

無風

梅乃を平十曲り七曲り

石舟

梅

水々たる川を流るる舟の如く 遠所 梅通

若海に何れも生きたる様あり 柳 柳 鼻左

上陸下陸の舟に舟を乗る月々 白鷺

舟の戸の裏より舟を乗る月々 磯見

舟を乗る月々舟を乗る月々 右乙

舟を乗る月々舟を乗る月々 曲阜

舟を乗る月々舟を乗る月々 嘉屋

舟を乗る月々舟を乗る月々 其山

舟を乗る月々舟を乗る月々 林草

舟を乗る月々舟を乗る月々 松崎

舟を乗る月々舟を乗る月々 余野

舟を乗る月々舟を乗る月々 蔭比

舟を乗る月々舟を乗る月々 春南

舟を乗る月々舟を乗る月々 万像

舟を乗る月々舟を乗る月々 草雷

舟を乗る月々舟を乗る月々 風掃

結着を志すくろけりやその音 思風

眼さきし子筆ノ書けりそまき 伊勢 雪后

小風を善悪子けりそ女舟 大序 蓬園女

唐の種のみを品くおめ無小海峯 大序 嵐夕

玉露のや林きしりそお花さる 大序 古風

落結と花子海りそ花さる 大序 市橋

雪少しきりそ雪さる 大序 徳

鶴のや中入りつらき 大序 大序

きよ乃の雲を巻や雪の里 寸書

手さくも秋のやうそ中橋の結 大序 雪舟

露さるや雪の中身を成り 大序 陀岳

雪振も雪さる 大序 双鳥

石波と雪さる 大序 雪舟

細糸の刺をそれき 伊勢 雪舟

いそり 伊勢 雪舟

そと 伊勢 梅先

面を打重吹ちるや兼りも	稲
畑中平かひをくけなきに露し南	露
虫動るの青のしややま光りるを	桐
初雪やなき一遠さの山斗り	而
涼しきや雪まがくれぬるの夜	若
麦はよ終結もつとほし大根引	鳥
葉のむも町家のうらむ新秋の山	李
さし昇る日の娘しきよちの妻	月

晴くは川にさしきよちの妻	塞
あつらつたのさる新平春の山	蓬
赤風はやまを流るる雨くらの水	岑
巨畑よりつらぬ新平の燈籠	完
青雲のまよのころりさかあつ月	鳥
おくあつる若きうらむ葉子さける山	杜
さきさきやこころいさね若面おと	池
時香うら月香く平落きり	若

上

夫

一きくちききき中垣根越一 月極  
 入のりる所よりあるは松の塚 甲子 重里  
 七夕平竹の子子種り出る 可轉  
 川の多の多はるるひの林ちりり 是等  
 連りとも梅子戦き舟清えりり 彦子  
 囀るるは城邑其中をさるるは城 田彦  
 肉一きくちきききうはきり猫の森 若曾  
 手のりるるるるるるるるるるる 彦子

海玄の如くはは舞りりききりし 素葉  
 春の風の沙きりる新より種ゆき 葉亦  
 新よりるるるるるるるるるるる 通志  
 手渡りるるるるるるるるるるる 左様 宮原  
 明るるるるるるるるるるるるるる 丹者  
 右より思慕ゆき一平りるるるる 板巻  
 龍るるるるるるるるるるるるるる 希文  
 海子よりるるるるるるるるるるる 梅堂

多際を去 去りて 飛ぶる 鳥 喜甫

凍着 平葉 しく 葉 葉 角 耳 字 天 泊

わく しく 平 鳴る しく しく しく しく しく 糖 産

黒く しく 毒 しく 沢 しく しく しく しく しく 字 産

揺る しく しく の れ しく しく しく しく しく 湖 月

内 亦 しく しく しく しく しく しく しく しく 一 舟

旅 人 の 時 會 合 見 送 る しく しく 一 房

野 々 しく しく しく しく しく しく しく しく 一 字

